



No. 106

ティー・ブレイク

Tea Break

頑固者どうし

5月と言えば男の子の節句である。「男子の本懐」などという言葉も古めかしくなり、東京では鯉のぼりを見ることも殆ど無くなったが、それでも男の子に生まれたからには「身を立て、名を上げ」を願う親心には変わりはない。

けれども、最近知ったことではあるが、男の子が成功する条件というものの中に、実は、厳格な父親と不仲であること、というのがあらしい。こんなことを聞くと、全国で約3000人も居る特許事務所の所長の方々も、どこかに思い当たる節があるのではないかと思う。

一応の所長である私自身も、成功というにはまだまだほど遠いものの、父親とはかなり不仲であった。自分の父親にしても、今の私の職業など、きちんと知ろうとはしない。昔気質で頑固な父親からすれば、自分の職業がもっとも最高位にあり、それを継がなかった長男など、反逆者でしかないからである。

しかも、あの時代は仕事がすべてであった。当然のことながら、わが父親も、いわゆる仕事一筋の人間であった。週休2日などとてもなく、信じられないことに、日曜日とて毎日が休みというわけではなかった。

ところが、子供が親に求めるのは、お金でも美味しい食事でもない。自分と一緒に過ごしてくれる「時間」である。いくらお金や物が豊富でも、子供は幸福ではない。子供らが最も欲しているのは、時間なのである。

というわけで、仕事一途の父に対しては、ご他聞に漏れず、「父さんは、ちっとも俺たちのことを考えてくれない」と言っては反抗したが、今となってみると、自営業を営む今の自分はやはり、子供と過ごす時間がすごく短い。そんなわけだから、たまに電車を見せに連れて行ったりすると、とても喜ぶ。そして、隣ではしゃぐ子供を見て、自分も昔、材木の配達のついでにトラックに乗せてもらって、電車を見たことを思い出す。そうして、「いくら忙しかったとはいえ、「ついで」って言うのは、無いよなあ」とちょっとした恨み言をつぶやき、わざわざ時間を作って子供を連れてきた自分のほうが余程やさしくして良い親だと思ってみる。

一方の子供は、目の前を2～3分おきに通る電車をじっと見ているが、まったく飽きる様子がない。私のほうは少々飽きてきて、時計に目をやるようになる。で、「ちょっと待てよ」と思う。田舎の電車は2～3分おきに頻繁に来るなどというようなことは無い。あの頃であれば、1時間に1本程度である。

けれども、職人氣質の親父は、実はいちいち時刻表を調べてそれに合わせて配達に行っていたなどということは、絶対に口には出さないであろう。あの親父であればこそ、決して口を割らないに違いない。けれども、ハリウッド映画のように「お父さんは、お前を愛していた」なんて言われたら、気持ちが悪いだけである。逆説的ではあるが、やはり親父には、そのことを黙ったままで居てほしいと思う。

これからも、父親に対して素直になることはできないであろうし、たとえ彼の寿命が尽きることがわかったときですら、それができるかどうかは、きわめて怪しい。一縷の望みは彼がこのティーブレイクを読むことである。何のことはない。インターネットが発達した現在であればこそ、ほんの一瞬の作業で容易にここへたどり着けるはずである。

とは言っても、見て欲しいような、それでいて見て欲しくないような...というわけで、気持ちは複雑であるが、とりあえず、今度の連休には孫を連れて遊びに行ってみようではないか。なるべく早い時間に行こう。鯉のぼりを見ることも、できるかもしれない。

(正)

Playing a tug-of-war

